

「難攻不落」の

若狭国吉城と

「国吉籠城戦」の真実

永 禄6（1563）年から数年に渡り、越前朝倉氏を相手に激しい籠城戦を繰り広げた城がありました。美浜町佐柿にあった山城、国吉城です。城主は若狭国守護大名武田氏の重臣、粟屋越中守勝久で、「難攻不落の城」として知られています。その戦いの様子は、粟屋方に参加した地侍、田辺半太夫安次が昔語りとして残し、江戸時代を通じて様々な人が書き写し、軍記『国吉籠城記』として広まりました。しかし、ここで描かれている、若狭国を我が物にしようとする朝倉勢の侵攻を粟屋方が撃退するという物語は、全て史実というわけではありません。

まず、この城は当時「国吉城」で

夜襲など、語り手である田辺半太夫の実体験ゆえ、詳細で激しく、リアル感があります。攻める朝倉勢も、大軍の力攻めや付城の築城、青田刈り、乱捕り、調略、当主の武田孫八郎元明の拉致（朝倉側では保護）と、あらゆる戦術を用いました。実際に、朝倉勢が築いたという付城群は現存しており、元明が一乗谷に居住していたことも史実です。

はなく、地名の「サガキ（佐柿）城」と呼ばれていました。「南北朝期に常国国吉が築き、国吉の城と呼ばれた。」というエピソードが『国吉籠城記』に記され、定着したとみられますが、勝久の子孫は「サガキ（佐賀伎）城」と書き残しています。

また、朝倉氏の若狭侵攻も、実は縁戚関係にある武田氏の支援が目的でした。当時の武田氏は、当主の家督争いや重臣の謀反等が相次ぎ、朝倉氏を頼りに権力を強化したい当主らと、朝倉氏の影響を排除したい勝久ら家臣団の対立があったのです。

一方で、戦いの描写は、侵攻する朝倉勢を食い止めた関峠の迎撃戦、国吉城の籠城戦法、中山の付城への

元亀元（1570）年4月、勝久は国吉城に織田信長を迎え、朝倉攻めに加わりました。この戦いは織田軍の撤退で幕を閉じますが、織田軍は国吉城を経由して京に撤退しています。国吉城の目前、佐田の海岸で朝倉勢に追われて壊滅寸前の木下秀吉隊を、同じく撤退中の徳川家康軍が救ったという地元の伝承もあります。無事に撤退した織田・徳川軍は、同年6月に近江国姉川で浅井・朝倉軍と激突して勝利したのです。

もし、国吉籠城戦で国吉城が落城していたら、織田軍の朝倉攻めも違ったものとなっていただでしょうか。粟屋勝久の活躍と国吉籠城戦の結果がもたらしたその後の歴史への影響



本丸跡に建つ 国吉城址碑

は、決して小さいものではなかったといえます。



若狭国吉城址全景

関連史料・ゆかりの地

軍記『国吉籠城記』と 田辺半太夫家伝来の甲冑



いよねだんがえにまいどうくそく 伊予札段替二枚胴具足 (田辺半太夫家旧蔵)

【住所】若狭国吉城歴史資料館：美浜町佐柿25-2（美浜ICより車で約5分）



『佐柿国吉籠城記全』天保13（1842）年（若狭国吉城歴史資料館蔵）

国吉籠城戦に粟屋方として参戦した地侍、田辺半太夫安次が、戦いの様子を昔語りとして記した『国吉城之記』が江戸時代を通じて書きされ、世に広まった軍記物。同家伝来の甲冑も残っています。

参考資料等

美浜町教育委員会編『戦国若狭と国吉城（佐柿国吉城ブックレット国吉城の章第2巻）』、『山東の歴史と風土』美浜文化叢書刊行会『平成29年度秋季企画展図録「徳川家康～美浜に残した足跡をたどる～」』若狭国吉城歴史資料館

執筆・協力

若狭国吉城歴史資料館 館長 大野 康弘